

マドンナの宝石／スケーターズ・ワルツ

マドンナの宝石／スケーターズ・ワルツ

**DAMP**  
STEREO D000-0014 16



おかげさまで30年

## 創立30周年記念盤

### ごあいさつ

DAM会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。弊社はお陰を持ちまして、本年11月、創立30周年を迎えることができました。30年間の長きに亘る皆様のご愛顧に、社員一同、心より御礼申し上げます。ここにお届け致しますDAMオリジナル・ディスクは創立30周年の感謝を込めて制作致しました記念盤でございます。既に、アナログ・ディスク、コンパクト・ディスクを合わせ、150タイトルの越えるソフトを制作し、毎回、会員の皆様を始め、業界各方面でも、そのクオリティの高さで注目を集めていますが、この創立30周年記念盤は、いわばこうしたソフトの集大成であり、さらに皆様にお喜びいただけるソフト作りの新たな一歩となるものであります。この一枚をご家族の皆様で心行くまでお楽しみ戴ければ幸いに存じます。

さて、弊社は創業以来、特にオーディオ、ビジュアル分野に積極的に取り組み、単にAV機器の販売に止まらず、AVを豊かにお楽しみいただくための様々な催しをご提供して参りました。有名アーティストを招いての生録音会、コンサートへのご招待、数々のAVセミナーなど、その時々話題性や、新技術を逸早く検証する進取の気風に富んだ企画により、皆様のご支持を得て回を重ねております。弊社はこれからも、AVのハードウェアとソフトウェアは不可分のものとの考えで、諸政策を実施してまいる所存です。その一環として昨秋よりAVソフト宅配システム「そふとっきゅう」を始めました。創立30周年を機に、今後も今まで以上に時代を尖鋭にとらえ、新たな試み、新たな企画により、皆様のAVライフにご奉仕して参ります。変わらぬご支援、お引立てよろしくお願い申し上げます。

第一家庭電器株式会社 代表取締役社長・星野 孝



# Family Concert / THE JEWELS OF THE MADONNA THE SKATERS WALTZ

## DISC 1

ヴォルフガング・サヴァリッシュ

- ① グリンカ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲 ..... 5'19"
- ② ボロディン：中央アジアの高原にて ..... 7'21"
- ③ ムソルグスキー：交響詩「禿山の一夜」 ..... 10'50"
- カバレフスキー：組曲「道化師」作品26
- ④ プロローグ ..... 0'58"
- ⑤ キャロップ ..... 1'29"
- ⑥ 行進曲 ..... 1'08"
- ⑦ フルツ ..... 1'12"
- ⑧ バントマイム ..... 1'14"
- ⑨ 間奏曲 ..... 0'50"
- ⑩ 叙情的なシーン ..... 1'15"
- ⑪ ガヴォット ..... 1'34"
- ⑫ スケルツォ ..... 1'38"
- ⑬ エピローグ ..... 1'56"
- プロコフィエフ：「三つのオレンジへの恋」作品33より
- ⑭ 行進曲 ..... 1'34"
- ⑮ スケルツォ ..... 2'24"
- リムスキー・コルサコフ：スペイン奇想曲 作品34
- ⑯ アルボラダ ..... 1'14"
- ⑰ 交奏曲 ..... 4'27"

- ⑱ アルボラダ ..... 1'18"
  - ⑲ シェーナとジブシーの歌 ..... 5'09"
  - ⑳ アストゥリアのファンダンゴ ..... 3'23"
- 指揮：ヴォルフガング・サヴァリッシュ  
バイエルン国立歌劇場管弦楽団  
w/ルイス・ミナル(ヴァイオリン・ソロ) ⑱・⑲～⑳

## DISC 2

ヴォルフガング・サヴァリッシュ

- ① スッペ：喜歌劇「軽騎兵」序曲 ..... 6'43"
  - ② エロール：歌劇「ザンバ」序曲 ..... 7'21"
  - ③ スメタナ：歌劇「売られた花嫁」序曲 ..... 6'29"
  - ④ スッペ：喜歌劇「詩人と農夫」序曲 ..... 9'21"
  - ⑤ オッフェンバック：喜歌劇「天国と地獄」序曲 ..... 9'24"
  - ⑥ ヴォルフ＝フェーリ：歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲 3'52"
  - ⑦ ベルリオーズ：劇物語「ファウストのごう罰」より  
「ラコッツイ行進曲」作品24 ..... 4'29"
  - ⑧ ジャプリエ：狂詩曲「スペイン」 ..... 6'27"
- 指揮：ヴォルフガング・サヴァリッシュ  
バイエルン国立歌劇場管弦楽団  
w/ペーター・ヴェブケ(チェロ・ソロ) ④  
w/ルイス・ミナル(ヴァイオリン・ソロ) ⑤





ヴォルフガング・サヴァリッシュ



アンドルー・デイヴィス

## DISC 3

## アンドルー・デイヴィス

- ①エルガー：愛のあいさつ、作品12……………3'35"
- ②スッペ：喜歌劇「軽騎兵」序曲……………6'36"
- ③レハール：ワルツ「金と銀」……………8'18"
- ④ボンキエルリ：時の踊り〜歌劇「ジョコンダ」より……………9'19"
- ⑤ワルトイフェル：スケターズ・ワルツ……………8'15"
- ⑥ヴォルフ・フェーリ：歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲……………4'12"
- ⑦イヴァノヴィッチ：ワルツ「ドナウ河のさざ波」……………7'55"
- ⑧ボロディン：中央アジアの高原にて……………6'40"
- ⑨ローザス：ワルツ「波濤を越えて」……………5'34"
- ⑩マスカーニ：歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より間奏曲……………3'11"
- ⑪エルガー：行進曲「威風堂々」第1番 作品39の1 ……6'42"
- ⑫ヘンデル：ラルゴ「オンブラ・マイ・フ」  
歌劇「クセルクセス」より……………3'14"

指揮：アンドルー・デイヴィス  
フィルハーモニア管弦楽団

クラシックの楽しさ、素晴らしさをもっともっと身近に感じてほしくて、二人の指揮者、夢の組み合わせ。

世界の巨匠サヴァリッシュの、音楽を限り無く磨きあげた美しい演奏。新進気鋭のデイヴィスが生み出す、親しみやすく流麗な演奏。さらに、3曲は二人が同じ曲に取り組んで、演奏のちがいを聴くのも興味しんしんと、3枚のディスクには、クラシックの魅力がいっぱいに詰まっています。

## INDEX

- DISC 1、DISC 2 曲一覧……………1
- ヴォルフガング・サヴァリッシュについて……………2
- バイエルン国立歌劇場管弦楽団について……………5
- サヴァリッシュ・インタビュー……………7
- DISC 1、DISC 2 曲解説……………10
- レコーディングにあたって……………15
- マイクセッティング……………17
- 録音ダイアグラム……………18
- DISC 3 曲一覧……………19
- DISC 3 曲解説……………20
- アンドルー・デイヴィス、フィルハーモニア管弦楽団について……………23
- レコーディングにあたって……………24
- マイクセッティング……………27



# マドンナの宝石

## サヴァリッシュ

バイエルン国立歌劇場管弦楽団

### DISC 1

- ① 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲  
(グリーンカ曲) ..... 5'19"
- ② 中央アジアの高原にて(ボロディン曲) ..... 7'21"
- ③ 交響詩「禿山の一夜」(ムソルグスキー曲) 10'50"
- 組曲「道化師」作品26 (カバレフスキー曲)
- ④ プロローグ ..... 0'58"
- ⑤ ギャロップ ..... 1'29"
- ⑥ 行進曲 ..... 1'08"
- ⑦ ワルツ ..... 1'12"
- ⑧ バントマイム ..... 1'14"
- ⑨ 間奏曲 ..... 0'50"
- ⑩ 叙情的なシーン ..... 1'15"
- ⑪ ガヴォット ..... 1'34"
- ⑫ スケルツォ ..... 1'38"
- ⑬ エピソード ..... 1'56"
- 「三つのオレンジへの恋」作品33より  
(プロコフィエフ曲)
- ⑭ 行進曲 ..... 1'34"
- ⑮ スケルツォ ..... 2'24"

### スペイン奇想曲作品34

(リムスキー=ニコラソフ曲)

- ⑩ アルボラダ ..... 1'14"
- ⑪ 変奏曲 ..... 4'27"
- ⑫ アルボラダ ..... 1'18"
- ⑬ シェーナとジプシーの歌 ..... 5'09"
- ⑭ アストゥリアのファンダンゴ ..... 3'23"
- W/ルイス・ミナル(ヴァイオリン・ソロ) ~ ⑬, ⑭, ⑮, ⑯

### DISC 2

- ① 喜歌劇「軽騎兵」序曲 (スッベ曲) ..... 6'43"
- ② 歌劇「ザンバ」序曲 (エロール曲) ..... 7'21"
- ③ 歌劇「売られた花嫁」序曲 (スメタナ曲) ..... 6'29"
- ④ 喜歌劇「詩人と農夫」序曲 (スッベ曲) ..... 9'21"
- ⑤ 喜歌劇「天国と地獄」序曲  
(オッフエンバック曲) ..... 9'24"
- ⑥ 歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲  
(ヴォルフ=フェラーリ曲) ..... 3'52"
- ⑦ 劇的物語「ファウストのこう罰」より「ラッツツィ行進曲」作品24  
(ベルリオーズ曲) ..... 4'29"
- ⑧ 狂詩曲「スペイン」 (シャブリエ曲) ..... 6'27"

W/ペーター・ヴェブケ(チェロ・ソロ) ~ ④

W/ルイス・ミナル(ヴァイオリン・ソロ) ~ ⑤

## 純粋な音楽の道を歩みつづけて、頂点で活躍を続けるマエストロ。

——— 真鍋圭子



テレビ、ラジオを通して日本全国津々浦々、その名と顔を一番良く知られている指揮者は何といってもヴォルフガング・サヴァリッシュであろう。それもそのはず、彼は1964年の東京オリンピックの年に初来日して以来、67年からは毎年NHK交響楽団を指揮するために、もう20年以上、一年たりとも欠かすことなく日本を訪問しているからである。またこの間、ウィーン交響楽団とスイス・ロマンツ管弦楽団を率いて来日、名演奏の数々を聴かせてくれた。

1950年代の初めから、サヴァリッシュはカラヤンの次の世代を担う若きドイツ音楽界のホープとして、輝かしいスター街道を走り始めていた。1953年、30才を迎えるまでに、ベルリン・フィル、ザルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭へのデビューを飾り、彼の名は一躍ヨーロッパ音楽界の話題を総ざらいしてしまったのである。カラヤンのレコーディング・プロデューサーとして名高いワルター・レグゲが即座にサヴァリッシュをロンドンに招き、翌年からはフィルハーモニア管弦楽団とレコーディングを始めている。

日本に初来日した頃のサヴァリッシュは、ヨーロッパの主要都市、主要オーケストラ、主要劇場を制覇しつつ、まさに破竹の勢いの若きマエストロであった。ところが、サヴァリッシュの音楽観、人生観、性格は、すでにこのような音楽産業やマスコ

ミの喧噪に一線を画し始めていた。極めて繊細な神経の持主で、謙虚でシャイなこの人は自分の意志なくマネージャーの思惑によって動かされたり、音楽産業の意図によりレパートリーを決定させられたりすることに嫌気を覚えたのだろう。ある時からサヴァリッシュは、これ等の世界に明らかに背を向けて一人歩きをするようになった。若くして頂点をきわめ尽くしてしまった人だからこそできる、“going my way”の精神である。そしてその“道”とは、雑念のない純粋な音楽の道であった。

5才の頃からピアノを始め、音楽学校に入るまでに音楽理論、作曲をすべて個人レッスンで学んでいたサヴァリッシュは、戦後ミュンヘンの高等音楽学校に入学し、わずか一学期で卒業試験にパスしてしまう。すぐに隣のアウグスブルクのオペラハウスに就職したが、当時のミュンヘンの“新音楽”というサークルで、戦前は演奏することが許可されていなかったフランス音楽やロシア音楽の譜面を山のよう積み上げて夜っぴいて演奏し続けたとのこと。とにかく、この人は音楽することが職業というより、趣味なのである。サヴァリッシュのピアノは、それだけでファン層がある程だが、彼はピアニストになろうと思ったことはなかったとのこと。この分野もただただ彼の音楽することの一部なのである。

彼がピアノを練習しているのを聞いたことがないと、彼を16才の時から知っている夫人が言う。仕事

が大変な時、リラックスするためにピアノを弾き、ピアノを弾き終るとどんなストレスも解消して、また上機嫌になるのだという。サヴァリッシュは現在、バイエルン国立歌劇場の総監督の地位にある。バイエルン州の主都ミュンヘンにあるナショナル劇場とその隣にある旧レジデンス劇場、その裏手にあるマールシュタール実験劇場の三つの劇場の公演の総責任者であり、1,300人の従業員をかかえる地方自治体の一組織の運営責任者なのである。さらに、指揮者として音楽総監督の任務も兼任しているから、その多忙さは想像を絶する。

サヴァリッシュのミュンヘンでの毎日は、朝9時ぴったりに彼の劇場の執務室で始まる。会社の社長と同じく、机の上に積み上げられた書類に目を通し、



スタッフとのミーティング風景

サインをする。控室は病院の待ち合い室のように、彼と話す機会を待っている人達であふれている。10時から、音楽練習のある時は1時まで練習、1時から新しい歌手のオーディション。これが無い時は続いて事務仕事。食事に帰宅、とんぼ帰りでまた劇場、そして仕事の続き。夜に彼が指揮をする時だけは、午後を休養と準備の時間としている。1971年からバイエルン国立歌劇場の音楽総監督を引き受けているが、それにプラスして今の「オペラ・ディレクター」の責を担ってからはや7年余り。こんな超人的ハードスケジュールをこなしているサヴァリッシュを内から支えているのは、自分の生れ故郷ミュンヘンのこの劇場、自分が子供の頃両親に連れられて来て指揮者になることを決心したこの劇場への愛情に他ならない。世界中の名だたる劇場で指揮をしてきた経験から、この劇場がそれ等より勝るとも劣るとは思われない。こんなに素晴らしい劇場で音楽できるチャンスがあるのに、何故かで指揮しなければならないのか、というのが彼の持論。

現在のバイエルン国立歌劇場は、サヴァリッシュのこれだけの愛情の成果が着実に実を結び、この劇場の歴史の中でも一大黄金時代を生み出している。18年間に渡る彼の指導のもとで、オーケストラは今やベストの状態にある。

これ程多忙のサヴァリッシュが世界の名だたるオーケストラからの招きを断り、毎年日本のために5



週間もの時間を作っているのは世界の音楽界の七不思議だという。理由はただ一つ、自分の劇場を愛しているのと同様、彼は日本と、日本人とNHK交響楽団を愛しているのだ。レコーディング嫌いのサヴァリッシュが今回の録音を引き受けてくれたのも、これが日本の会社からの申し出だったからだと思う。レパートリーも、彼とこのオーケストラにとっては珍らしいものだが、自分達の「音楽的満足」と名付けて、セッションには念には念を入れ、自分達に十分納得のいくまで、脱帽する程丁寧に真剣に真面目に録音していた。録音完了後、サヴァリッシュは一言、「いい録音になったと思いますよ。」この自分に厳しい人が自らこんなことを言うのは始めてだとは、トーン・マイスターの弁。歴史的な名盤が誕生したようである。



# 演奏する喜びがあふれるほどに伝わってくる、そんなオーケストラ。

—— 真鍋圭子

ミュンヘンの宮廷楽団を前身とするこのバイエルン国立歌劇場管弦楽団は、現存するオーケストラ中最古のものである。ウィーンやドレスデンの宮廷楽団よりずっと早く組織され、1530年以来の団員の全

メンバー表が今に至るまでずっと残っている。ヨーロッパ中を旅行して歩いたモーツァルトが、このオーケストラに接して感嘆したことも、父親への手紙に書かれている。彼がこの劇場、この管弦楽団用に

リハーサル風景



作曲した名作「イドメネオ」は、オーケストラ・パートが難しく、当時の他の劇場では演奏できなかったという。ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」もこの劇場で初演されたが、やはりこのオーケストラの実力があってこそ初演可能となったのである。

宮廷指揮者としてここに就職することを熱望したモーツァルト。国王ルードヴィッヒII世の熱烈な擁護のもとに4作品をここで初演できたワーグナー。ミュンヘン生れでこの劇場の常任指揮者を二度務めたリヒャルト・シュトラウス。この三人の作曲家の音楽の伝統は、このオーケストラの中で世代から世代へと受け継がれて今に至っている。

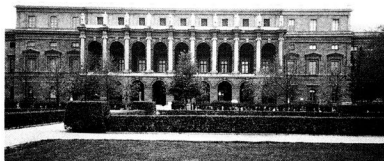
ブルーノ・ワルター、R・シュトラウス、カール・ベーム、H・クナッパーツブッシュ、クレメンス・クラウス、ヨーゼフ・カイルベルト等の音楽総監督の後をついで、1971年以来ヴォルフガング・サヴァリッシュがこの伝統の継承に全身全霊を捧げている。

この管弦楽団はウィーン・フィルと同じく国立歌劇場付の楽団ではあるが、独立したコンサート・シリーズを持っていて、コンサート・オーケストラとしての活躍も目ざましい。二年前にカルロス・クライバーとの演奏旅行で日本でもおなじみである。サヴァリッシュが音楽監督になって以来、その水準は着実に高くなっていて、今やオペラのオーケストラとしてはウィーンと並び称される実力を持っている。ミュンヘンにオーケストラは4つあるが、このバイ

エルン国立歌劇場管弦楽団の特徴はその音楽監督の影響からか、いつも安定しているということ。そして、バレエでも現代曲でもいいかげんな演奏、手をぬいた演奏をしないということである。他のオーケストラに比べて演奏回数が比較にならない程多いにもかかわらず、このオーケストラの団員は、いつも演奏に対する喜びを持っているのが客席に如実に伝わってくる。これが、このオーケストラの最大の魅力である。

このレコードの曲目は、彼等にとって耳慣れている音楽とはいえ、演奏するのは初めてのものばかり。細部の小さな不揃いまでサヴァリッシュに厳しく指摘されるので、一同緊張に次ぐ緊張。ブルックナーやブラームスの交響曲の録音の数倍も集中力を必要としたという。その結果、この録音は比較的地味な活動をしているこの管弦楽団の、プリリアントな実力を示す素晴らしい名刺となることだろう。

ヘラクレスザール外観



ほとんどが初めて指揮をした曲でしたが、かなり良い録音が出来たと思います。

—— インタビュアー：真鍋圭子

(M)：真鍋圭子

(S)：ヴォルフガング・サヴァリッシュ

～(M)：今回の録音の曲目には、サヴァリッシュさん

が初めて指揮なさるものも多かったと思いますが。

～(S)：ええ。私が指揮するのも初めて、このオーケストラが演奏するのも初めてという曲がほとんどでした。私達にとって最初の出会いであったにもかかわらず、良い録音が出来たと信じています。これ等の曲目は、いわゆる『最高水準で演奏されるべきポピュラー曲』で、私達がいつも演奏しているオペラやコンサートで取り上げられることはあまりありません。それだけに、日常これ等の曲を演奏して

いるオーケストラに比べて、より新鮮に緊張感と喜びを持って、先入観なしに取り組めたと思います。

私達にとっては全く新しい凝縮された世界に入ってしまった訳で、とても楽しく演奏できました。

～(M)：録音の準備、そしてリハーサルにかなり多くの時間をかけられたように思いますけれど……。

～(S)：勿論です。私達の通常のレパートリーに入っていない曲が80%ですから。ただし、多くの作品は何処かで、何となく聞いたことのある曲なのですが、総譜を見て勉強しなければならないのは、どの曲でも同じことです。

～(M)：という事は、ドイツでも日常生活の中で



は80%は初めての曲でした。ただし、これらの曲目は何処かで知っているというか、何かの機会に聞いたことのあるもので、総譜に相対するのは初めてですが、それは又やらねばならない事ですから。

～(M)：という事は、ドイツでも時々これらの曲を耳にする訳ですか？ 日常生活の中で何となくと言っておりましたが？

～(S)：「天国と地獄」や「売られた花嫁」の序曲、特に「売られた花嫁」は当然のことながら私達のレパートリーにも入っています。ところがヴォルフ＝フェラーリの「マドンナの宝石」は知られてはいるものの演奏されることはない。

今回のレパートリーの中でヨーロッパであまり馴染みのないものといえば、カバレフスキーの「道化師」組曲で、これらは私達の知らないレパートリーです。それから、例えば「ザンパ」序曲、「ルスランとリュ

インタビュ風景



プレイバック中のマエストロ



ドミラ」序曲などとは何かの折に放送で聞いたことのある作品ですが、私達のレパートリーにはなっていません。

ば、「ザンパ」、「禿山の一夜」、「ルスランとリュドミラ」等は、何かの折に放送で聞いたことのある作品です。「ザンパ」序曲は、私が10歳の時に、私のピアノの先生と一緒に連弾に編曲してあるのを弾いたことがあり、言わば思い出の曲です。

～(M)：サヴァリッシュさんはコンサートでどのような曲を指揮なさったことがおありですか？

～(S)：勿論です。カーニバルのコンサート、大晦日やニュー・イヤーズの特別コンサートではこのようないわゆるポピュラーな曲とか、ヨハン・シュト

インタビュー風景



ラウスのプログラムを振っています。オペレッタも昔、アウグスブルクの劇場で専門に振っていたんですよ。

～(M)：今回のような曲目の方が、例えばブラームスの交響曲などと比べて録音により時間がかかったとオーケストラの人達が言っていましたか……？

～(S)：そうです。レパートリーが私達にとって未知のものが多かったですから、完璧なものに仕上げるのに時間がかかりました。例えば「ルスランとリュドミラ」のように精密さとブリリアントな演奏が命とも言える作品では、ブラームスの交響曲のように大きな流れのある作品よりも、仕上げるのに神経を使い、長時間を要しましたが、全体として、満足できる録音になったと思います。

#### インタビュー／真鍋圭子

真鍋圭子さんは在ミュンヘン10年以上の音楽ジャーナリスト。カラヤン、サヴァリッシュ、F=ディースカウをはじめ、世界の著名音楽家と親密なお付き合いがあり、幅広く活躍をなさっております。

# 聴かせどころを心得たあざやかな棒さばきで、一曲ごとの 味わいを上手に語ってくれる。

——岡 俊雄

ここに録音されたCDは、サヴァリッシュではめずらしいプログラムがずらりとならんでいる。とくに1枚目のロシア管弦楽曲集というのは彼の夥しいレコーディングのなかでもみられなかった曲目ばかりである。2枚目もオーケストラ・ショウ・ピースとしておなじみの知名の曲がずらりとならんでいる。

この2枚のCDに収められた曲目のすべては、それぞれが独立したおもしろさにあふれた名曲ばかりである。料理でいえばア・ラ・カルトのように1品ずつをそのときの気分によってききたい曲だけをえらんでたのしみたい音楽である。LP時代になって、1枚のレコードに多くの曲が雑居していると、好みの曲だけをえらんできくという手数が案外わずらわしく、小品をきくたのしみをわすれてしまうようになった。CD時代にはいって、ききたい曲のトラックを指定すればよいという操作がひじょうに簡単にできるようになったので小品集レコードのもつ本当のよさが息をふきかえすようになったことは喜ばしい限りである。この2枚のCDに収められた曲目は、筆者のように1930年代から50年以上レコードをきいたものにとっては音楽のたのしさを知らされるオーケストラ名曲ばかりがずらりとならんでいる。通してきくもよく、そのときの気分によって、好きな曲だけを好きな順序にプログラミングしてきくのもよく——といった性質のものである。サヴァリッシュ

のようにオーケストラのコントロールにすぐれた能力をもった指揮者が、きかせどころを心得たあざやかな棒さばきで、1曲ごとの味わいを上手に語ってくれる。そこから生まれた小品集のおもしろさは、すぐれた録音によって最上のオーケストラ・サウンドで音楽をきくたのしみを倍増させてくれるのである。

## DISC 1

### ① グリンカ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

ミハイル・グリンカ（1803-1857）はロシア近代音楽の祖である。19世紀のロシアの音楽文化は西欧にたいして明らかに後進国であった。旅行好きで青年時代から西欧を訪れたグリンカは、進んだ西欧の音楽技法をロシア民族音楽の土壌に移植し、最初のオペラの傑作「皇帝に捧げし命」（現在は「イワン・スサーニン」と呼ばれている）を発表したのは33才のときで、その6年後の第2作が「ルスランとリュドミラ」で、この2作によりグリンカはオペラ史上に燦たる名前を止める。キエフ大公の姫リュドミラをめぐる3人の求婚者が彼女を得ようとさまざまな冒険の試練を重ねリュドミラの愛人であった騎士ルスランが栄冠を得る波瀾万丈の物語。西欧で早くから序曲だけが広く評判を呼んでいたのはロッシニ二風の活力にあふれた音楽が聴き手を魅了したからである。主要主題旋律はオペラの劇中のアリアやモティーフからとられているが終結部に、下降全音階進行

(低音部に)を用いている。50年後にドビュッシーが用いて有名になった技法の先駆の使用としてグリンカの独創をます有名な例になっている。

#### ② ポロディン：中央アジアの高原にて

アレクザンドル・ポロディン（1833-1887）は、グリンカの没後、19世紀後半にロシア音楽を確立させた5人組（国民楽派）のひとり。本職は医化科教授の公職の余暇に作曲をし、大作オペラ「イーゴリ公」や交響曲、室内楽などの傑作をのこしている。ポロディンは東洋的なものが大好きであった。1880年アレクザンドル2世在位25周年にあたり、12人のロシアの作曲家が、ロシアを描く主題の作品を書くことになったとき、ポロディンは、近東ロシア領を行進する軍隊の描写を主題にえらんだのがこの曲で、タイトルに“管弦楽のスケッチ”と附記されている。荒涼たる砂漠の情景がヴァイオリンの高音Eの持続からうかびあがってき、ロシア軍に護衛された隊商が遠くから来、また去ってゆく様子が音楽として描かれる。クラリネット独奏のロシア風の歌と、そのあとに出るイングリッシュ・ホルンの東洋的旋律の美しさがとくに印象的である。

#### ③ ムソルグスキー：交響詩「禿山の一夜」

国民楽派最大の創造的作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839-1881）の1877年の作。彼は早くからゲーテの「ファウスト」のワルブルギスの夜のような奇怪な妖怪の容姿の音画化を意図したスケッチを書



ヘラクレスザール外観

いていた。のちに5人組の仲間からのすすめで「ムラダ」という歌劇にその情景をもりこもうとして果たさず、彼の死後、リムスキー＝コルサコフによってオーケストレーションが完成1886年に初演された。キエフの町のちかくにある禿山（トリグラフ山）にまつわる伝説によったもので、聖ヨハネ祭の夜、地下からさまざまな悪霊が現われ、闇の神への讃美と饗宴をくりひろげるが、夜明けの鐘とともに彼等は退散する。音楽はその物語の完全な標題音楽である。

#### ④ ～⑬ カバレフスキー：組曲「道化師」

ドミトリ・カバレフスキー（1904-1987）はショスタコヴィッチ、ハチャトゥリアンなどとならぶ、ソ連を代表する作曲家。1940年にM.ダニエルの児童劇「発明家と道化師たち」のための劇音楽を書いたが、そのなかの10曲をえらんで演奏会用組曲とした。劇は旅芸人たちが町の広場で公演するさまざまなスケッチからなったコメディ。組曲は、I プロローグ、



IIギャロップ、III行進曲、IVワルツ、Vパントマイム、VI間奏曲、VII叙情的なシーン、VIIIガヴォット、IXスケルツォ、Xエピソードのそれぞれがみじかい、たいへん機智とノスタルジーにあふれたもので、カバレフスキーの代表作となっている。

#### ⑭～⑮ プロコフィエフ：「三つのオレンジへの恋」行進曲とスケルツォ

ショスタコヴィッチとともに20世紀ロシアにおける最大の作曲家セルゲイ・プロコフィエフが1919年に書いたオペラ（初演は1921年シカゴ）から6曲をえらんだ組曲は、彼のオーケストラ曲の代表作のひとつになっている。ここで演奏されているのは、組曲でもとくに有名な第2、3曲である。この頃、プロコフィエフは革命のはじまったロシアから出て日本経由で渡米、1933年にソ連に復帰するまでパリを中心に活躍していた。この頃の彼は20世紀の前衛的スタイルを強烈に打ち出していた時代で、シャープな音の扱いの巧みさでは第一人者であった。

#### ⑯～⑳ リムスキー＝コルサコフ：スペイン奇想曲

国民楽派5人組のなかで最年少だったリムスキー＝コルサコフ（1844～1908）は海軍士官であったが、29おのとき退役して音楽に専念し、近代管弦楽法の大家として世界的に宣伝された。彼の華麗なオーケストレーションを示したのが1887年作の「スペイン奇想曲」88年作の「シェアラード」である。「奇想曲」はとくに標題的な意味はなく、全体が5つの部分か

ら成っている。アルボラダ——変奏曲——アルボラダ——シェーナとジブシーの歌——アストゥリアのファンダンゴで、それぞれスペイン的なタッチが、千変万化といってよいほど多彩なオーケストレーションで描き出されている。

## DISC 2

### ① スツペ：喜歌劇「軽騎兵」序曲

フランツ・フォン・スツペ（1819-1895）シュトラウス親子に代表されるウィーン・オペレッタ全盛期に活躍し、約150種の舞台作品を書いた。今日オペレッタとして上演されているものはわずかしかないが、彼の序曲は広く愛好されており、「軽騎兵」はその代表的なもので1866年の作。時のウィーンの人気詩人カール・コスタの作による軍隊生活を舞台にした喜劇。唖々たるファンファーレの導入部が魅力的。途中にハンガリー舞曲のチャルダスが用いられている。

### ② エロール：歌劇「ザンパ」序曲

L.J.F.エロール（1791-1833）は、同時代のイタリアのロッシーニに対峙して、フランスのオペラ・コミック作曲家として名声を博した人だが、今日彼の舞台作品は序曲が演奏されているだけ。「ザンパ」は1831年の作で海賊を主人公としたグランド・オペラで大理石像が出てきたりモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」と似ている内容。序曲はオペラの主要旋律がつぎつぎと現われる多彩な変化をもっている



ので今日もひろくきかれています。

#### ③ スメタナ：歌劇「売られた花嫁」序曲

ペドルジーハ・スメタナ（1824-1884）はチェコスロヴァキアの生んだ最初の創造的な作曲家で、1866年作のオペラ「売られた花嫁」はボヘミアの農民生活を生き生きと描きだした民族的喜歌劇の最初の傑作であった。オフエンバックの影響がつよいといわれているが、序曲の生命感のあふれるばかりの躍動は音楽的にも素晴らしい。

#### ④ スッペ：喜歌劇「詩人と農夫」序曲

スッペのオペラとオペレッタ作品は51篇。ほかの舞台音楽を加えれば200作をこえるといわれている。「詩人と農夫」は1846年に上演された第10作だがオペレッタではなく、K.エルマー作のコメディのための劇音楽で、劇中の音楽の主題を序曲に導入したもの。壮重な感じの序奏部から一転して嵐のようなアレグロから爽快な行進曲に転じ、最後は農民舞曲となる。

#### ⑤ オッフエンバック：喜歌劇「天国と地獄」序曲

ジャック・オフエンバック（1819-1880）は、ドイツのケルン生れだが、その名が示すようにフランス系で、パリ音楽院でチェロを学び、20才でオペラ・コミックのオーケストラのメンバー。30、31才でフランス座の指揮者となり、ミュッセの詩につけた歌曲で名をなし、1853年にオペレッタの第一作を発表した。以来、ウィーンのヨハン・シュトラウス2世とともに19世紀後半のオペレッタの黄金時代を築い

た。1858年に上演された「天国と地獄」の大ヒット以来、パリでオペレッタの王様の名声をほしいままとし、最晩年には「ホフマン物語」という幻想的なオペラの大作を書いている。「天国と地獄」という邦題は大正時代浅草オペラ全盛期にこの題で上演されて評判になったのでそれでおとるようになっているが、原名を直訳すれば「地獄のオルフェ」。ギリシャ神話で有名な詩人オルフェが愛妻の死を嘆き黄泉の国から連れ戻しにゆくという話を主題にしているが、



オペレッタ風に奇想天外な扱いがなされている。この序曲をひととき有名にしているのはフィナーレのギャロップの部分である。この音楽は19世紀末から

バリ名物のカンカン・ダンスの音楽としてベル・エポックを象徴するほど世界的に有名になってしまった。(日本ではサイレント映画時代の追かけの場面で必ずといってよいくらいに使われて、明治・大正生れの世代の人たちには別な意味でなつかしい音楽にもなっている。)

㊦ ヴォルフ＝フェラーリ：歌劇「マドンナの宝石」間奏曲

エルマンノ・ヴォルフ＝フェラーリ (1876-1948) はヴェニス生れのイタリアの作曲家だがWolfをヴォルフと発音していることが示すように父親がドイツ人である。ヴェニスとミュンヘンを活動の中心としたひじょうな多作家だったが、軽いオペレッタ風の作品を得意としており、ロマンティックな旋律の美しい作品をのこしている。彼の舞台作品では「スザンナの秘密」(1909)と「マドンナの宝石」(聖母の宝石、マドンナの首飾り——としても知られる。1911)がとくに有名。後者はヴォルフ＝フェラーリの唯一の本格的な悲劇的オペラで、恋こがれる女性から聖母像の首飾りの宝石をもってくれば結婚するといわれた青年が盗みをおかす。事件が発覚し罪を悔いた青年は自殺するという物語。3幕から成るこのオペラは幕間に2つの間奏曲がはいっており、ともに単独で演奏されることが多いが、第1間奏曲は感傷的な旋律の美しさでとくに愛好者が多い。

㊦ ベルリオズ：劇物語「ファウストのごう罰」「ラコッツィ行進曲」

フランス・ロマン派音楽の始祖エクトル・ベルリオズがゲーテの名作によった劇物語(オペラ形式で上演されることもある)の大作「ファウストのごう罰」(1846)のなかでもっとも有名な曲。トランベットのファンファーレからはじまる素晴らしいこの行進曲はもともとハンガリー人が名将ラコッツィを讃える歌からとられたもの。ベルリオズはこの行進曲をいれないばかりに原作にないハンガリーの場合にファウストを登場させるほどほれこんだ旋律であった。

㊦ シャブリエ：狂詩曲「スペイン」

フランス近代音楽の先覚者の一人エマヌエル・シャブリエ (1841-1894) の1883年の作。フランスの作曲家のスペイン趣味のさきがけをなした作。最初はホタ、第2はマラゲーニヤ、どちらも速いテンポの3拍子の舞曲。それからトロンボーンにカブよい第3のモチーフが出る(これはシャブリエの自作。前2曲はスペイン民謡の旋律をとっている)その三つの素材が自由な幻想曲風に展開する華麗な曲。この旋律は「スケーターズ・ワルツ」で有名なエミール・ワルトイフェル (1837-1915) のワルツ (1886) にも用いられている。両者ともタイトルは「España」だが、年代からもわかるようにワルトイフェルがシャブリエから借用したものである。

# 惜しみなく時間を費やし、入念な仕事が可能になるといえる。

—— 里見清司

バイエルン放送協会との共同制作で、レコーディング企画が実現されたのは今回が本邦初であり、この画期的な仕事は1987年11月、ミュンヘンにて行われた。マエストロ・サヴァリッシュ指揮～バイエルン国立歌劇場管弦楽団の演奏で、まさに世界のメジャー・レーベルが手がける内容を我々サイドで具体化したのだ。

数々の打合わせを済ませ録音当日がやってきた。ホールはヘラクレスザール。長方形につくられたホールでコンサート会場としては世界の中規模クラス（1300人程度のキャパシティ）の代表的な存在であり、収録スタジオとしてもバイエルン放送（BR）が常設のコントロール・ルームを置いてあることでも解る通り、数々の名レコーディングを生んでいる。今回の録音スタッフはBRの面々でトーン・マイ



シーメンス・オリジナル・コンソールボックス



Studer A-81

スター（プロデューサー）がウィルヘルム・マイスター氏、バランス・エンジニアはハンス・シュミット氏が担当して下さい。彼らは朝6時半にホール入りし、マイク等のセッティングにとりかかる。ステージに椅子が並べられると日本の様に、マイクスタンドを立てマイクを取り付けるのではなく、天井からマイクケーブルを各々降ろす仕組みになっている。ステージ上ではシュミット氏がトランシーバーでマイクケーブルの高さ等の調整をするためリモコンでオペレーターに指示を出す。前後の位置はホール2階手摺りから針金を張って調整する。全部で22本あったが2時間位で一応のポジションが決定、長年の経験で大体の位置は決っているようだ。

今回の録音はワンポイントマイク方式でなく、メインマイクを中心にしたマルチマイク方式、9時少し前、楽団員が集まり始め9時ジャスト、マエスト

ロ・サヴァリッシュが現われ「詩人と農夫」のリハーサルに入る。暫くホール内でリハーサルを聴く、音がふくよかに湧き出てくるようであった。日本でこのような音は聴いた事がない。ホールトーンは実に透明で素晴らしい。

その後ホール客席後方奥の最上階にあるコントロール・ルームに戻る。まずシュミット氏がメインマイクで全体の響き、音色、バランスを慎重に聴き、各パートに立っているマイクのフェーダーを上げ始めてバランスをとっていった。マイスター氏より木管の音像を少し後にさげるようにとの事で、即座にシュミット氏はデジタル・ディレイにその音と元音

をミックスする方法を用いた。この間、共同制作者としてマイスター氏は我々に、サウンド、楽器のバランスetc. OKかとの最終確認をされたが勿論文句のあろうはずがない。

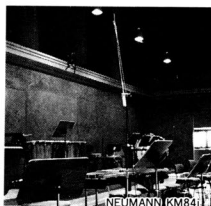
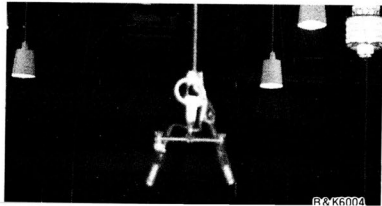
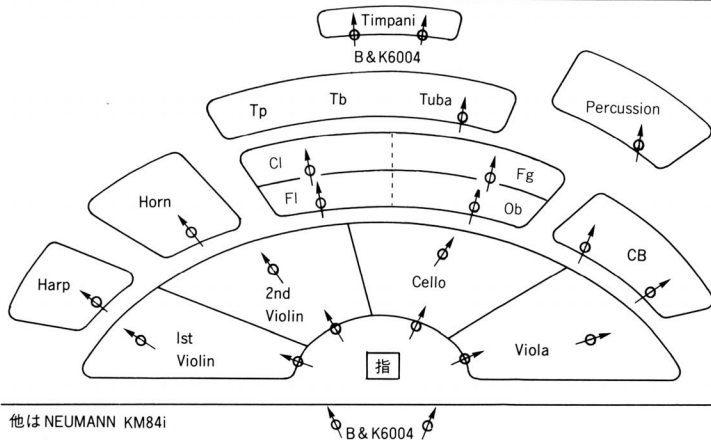
いよいよ本番が始まる。マイスター氏は、マエストロ・サヴァリッシュに信頼されているだけのこととはあり、実には確で細かい指示を出し進行させている。要所で楽器名の伝達を与えたとその通りシュミット氏は各々のフェーダー処理を行っていた。本邦のクラシック録音ではフェーダーはあまり動かさないのが定石ではあるが、録音するにあたり定石にこだわらず関係者の合意のもとであればこの方法も良いのではないだろうか。

以前、私はアメリカで、あるメジャー・レーベルのオーケストラ録音に立ち会う機会に恵まれたのだが、その際短い時間帯の中で、最良の音源を作るといふ、現在世界のクラシック業界における典型例とその厳しさを垣間見た。ところで今回のレコーディングに関しては、演奏者が初めてのレパートリーとは云え、先の録音の約3倍の時間を費やし、入念な仕事成家れたと思う。特にマエストロ・サヴァリッシュのたくいまれなヴァイタリティーと判断力、そしてあらゆる瞬間ごとに、真実の音楽的解釈をと奮闘して下さった成果が如実に表われていた。まさしく、ベストと云える録音が行なわれたのである。



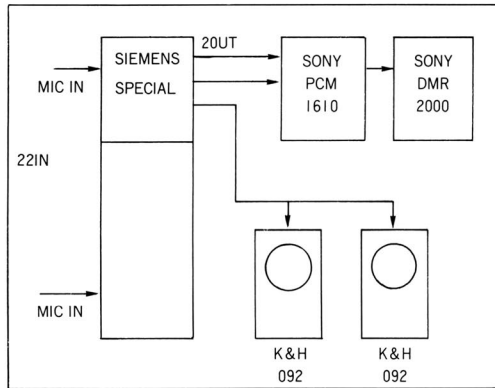
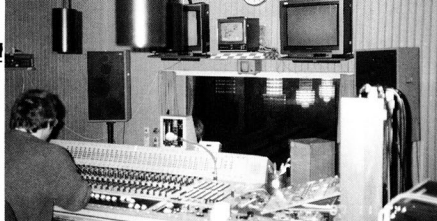
# マイク・セッティング

ヘラクレスザール内部



# 録音ダイアグラム

コントロール・ルーム



## Recording Data

Console: SIEMENS・32INPUT 20UT

Speaker & Amp: K&H・TYPE 092

Digital Master Recorder: SONY・DMR-2000

Digital Audio Processor: SONY・PCM-1610

Mic: B&K・6004

NEUMANN・KM84i

Digital Delay: EMT・445

LEXICON・MODEL 102

# スケーターズ・ワルツ

指揮: アンドルー・デイヴィス  
フィルハーモニア管弦楽団

- ① エルガー：愛のあいさつ、作品12…………… 3'35"
- ② スッペ：喜歌劇「輕騎兵」序曲…………… 6'36"
- ③ レハール：ワルツ「金と銀」…………… 8'18"
- ④ ボンキェルリ：時の踊り～歌劇「ジョコンダ」より…………… 9'19"
- ⑤ ワルトトイフェル：スケーターズ・ワルツ…………… 8'15"
- ⑥ ヴォルフ＝フェラーリ：歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲 4'12"
- ⑦ イヴァノヴィッチ：ワルツ「ドナウ河のさざ波」…………… 7'55"
- ⑧ ボロディン：中央アジアの高原にて…………… 6'40"
- ⑨ ローザス：ワルツ「波濤を越えて」…………… 5'34"
- ⑩ マスカーニ：歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より間奏曲 3'11"
- ⑪ エルガー：行進曲「威風堂々」第1番 作品39の1…………… 6'42"
- ⑫ ヘンデル：ラルゴ「オンブラ・マイフ」～歌劇「クセルクセス」より  
…………… 3'14"

philharmonia  
orchestra



# きら星のように輝く名曲がつまった、宝石箱のよう。

—— 安藤 博

## このアルバムについて

「音楽は私たちの生活に『必要』なものだろうか？」という問いに答えることは、思いのほか難しいことだが、少なくとも、音楽が私たちの生活を豊かにしてくれることは、確かな事実であろう。この場合「生活」とは、もちろん「心の生活」ということだが、たとえば、失恋などによって失意のどん底にあるとき、エルガーの「愛のあいさつ」やヘンデルの「ラルゴ」を聴かれるとよい。気持ちが落ち着き、深く慰められること請け合いである。

このアルバムは、上記の2曲を最初と最後に置き、あいだにきら星のように輝く名曲の数々をちりばめた、まさに宝石箱のような好企画だ。しかも演奏は、イギリス気鋭の指揮者アンドルー・デイヴィスと、これまたイギリス最高のオーケストラ、フィルハーモニア管弦楽団という、この上ない組み合わせである。美しいメロディーの数々は、大人にとっては、大切な宝石箱、子供にとっては、様々な種類のキャンディーが入った壺のように、一つ一つが、わくわくするような「心の」楽しみを与えてくれるにちがいない。

## ① エルガー「愛のあいさつ」

E.エルガー（1857～1934）は、バロック時代のパーセル以来、イギリス国民からもっとも大きな敬愛を受けている作曲家である。「愛のあいさつ」は、1888年に最初ピアノ曲として作曲され、翌年オーケ

ストラ曲に編曲されたものだが、その後、チェロやヴァイオリンなど様々な楽器のためにも編曲され、世界中からもっとも愛されている作品のひとつとなっている。この頃結婚した8才年上のキャロライン夫人との幸福な家庭生活を彷彿させる、美しく気品に満ちた旋律に彩られた実に暖かみのある音楽である。

## ② スッペ 喜歌劇「輕騎兵」序曲

スッペ（1819～95）は、ワルツ王ヨハン・シュトラウスと同じ頃、ウィーンでオペレッタ（喜歌劇）の作曲家として活躍した、ユーゴスラヴィア生まれの作曲家。1866年、スッペ47才のときに作曲されたオペレッタ「輕騎兵」は、当時の華やかな軍人たちの生活を愉快に描いたものだが、開幕前に演奏されるこの序曲は、「詩人と農夫」序曲とともに、今日でもしばしば演奏されている、オーケストラの、いわば「人気ナンバー」のひとつとなっている。まず、トランペットとホルンによるファンファーレによって開始され、続いて輕騎兵たちの騎馬行進を描いた軽快で華やかな音楽となる。

## ③ レハール ワルツ「金と銀」

F.レハール（1870～1948）は、「メリー・ウィドウ」や「微笑の国」などで知られる、ハンガリーに生まれ、ウィーンで活躍したオペレッタの作曲家。彼はヨハン・シュトラウスの後継者とも云われていただけあって、ワルツにも傑作を多く残しており、なか



でも「金と銀」は、とくに名作として知られている。1899年に作曲されたこの曲は、当時まだ軍楽隊の隊長をつとめていたレハールが、貴族たちの舞踏会のために書いた作品で、シュトラウスたちのウィンナ・ワルツと同様に親しみ易く美しい旋律をもった3つのワルツからなっている。

④ ポンキエルリ「時の踊り」～歌劇「ジョコンダ」より

ヴェネツィアの美しい歌姫ジョコンダを主人公として展開される、オペラ「ラ・ジョコンダ」は、イタリアの作曲家ポンキエルリ（1834～1886）の代表作として知られているが、その中の第3幕でバレエ場面の音楽として演奏されるのが、しばしば単独でも演奏されている「時の踊り」である。このバレエは夜明けから朝、昼、夜に至るまでの時の移り変わりを美しく描いたもので、音楽は視覚的なもの以上に、見事に光りと影の変化を鮮やかに描き出している。

⑤ ワルトトイフェル「スケーターズ・ワルツ」

ワルトトイフェル（1837～1915）は、ドイツ系のフランスの作曲家。パリを中心に「フランスのワルツ王」といわれ活躍した人で、生涯に250曲以上ものワルツを作曲している。それらの中で、「女学生」などとともに代表作として知られているワルツが「スケーターズ・ワルツ」である。1883年に作曲されたこの曲は、当時パリの人たちに人気のあったスポーツ、スケートを楽しむ人々を描いたもので、いかにも貴婦人たちが優雅にスケートを楽しんでいる姿が

眼の前に浮かんでくるような流麗な旋律が次々と繰り広げられる。

⑥ ヴォルフ＝フェラーリ 歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲

ヴォルフ＝フェラーリ（1876～1948）は、ドイツ人の画家を父にヴェネツィアで生まれたイタリアの作曲家である。彼の作品で今日も演奏されているのは、1911年に作曲されたオペラ「マドンナの宝石」の第1幕と第2幕の間に演奏される、この間奏曲だけといつてよいだろうが、この曲は、ヴァイオリンを中心に美しくメランコリックな旋律が切々と歌われ、聴く人に強い印象を与えずにはおかない。

⑦ イヴァノヴィッチ ワルツ「ドナウ河のさざ波」

イヴァノヴィッチ（1848～1905）は、ルーマニアの作曲家で、軍楽隊長をつとめていた人であるが、1880年に作曲したワルツ「ドナウ河のさざ波」によって、その名は世界中に知れ渡っている。曲は短い序奏に続いて4つのワルツとコーダからなっているが、幅広くゆったりと流れる河の大きさを彷彿とさせるメロディーが次々と繰り広げられ、その美しさは、同じドナウ河を題材としたヨハン・シュトラウスの名作「美しく青きドナウ」にも決してひけをとらないといつてよい。

⑧ ボロディン「中央アジアの高原にて」

ロシア国民楽派五人組の一人、ボロディン（1833～87）が1880年に作曲した交響詩の名作である。\*交響詩とは、オーケストラにより、ある一定の標題（プ

ログラム)を物語詩のように歌いあげるものだが、この曲の場合は、荒涼とした中央アジアの高原をラクダに乗って行き交うロシアの隊商とアジアの隊商の情景が、まるで絵画のように生き生きと表現されている。最初に現れるクラリネットによるのどかな旋律が、ロシアの隊商を、やがて現れるイングリッシュ・ホルンによるエキゾチックな旋律が、アジアの隊商をあらわしている。

#### ⑨ ローザス ワルツ「波濤を越えて」

作曲者のJ.ローザス(1868~94)は、わずか26才で世を去ったメキシコのヴァイオリニスト兼作曲家であるが、彼の名は23才のとき作曲したワルツ「波濤を越えて」1曲で、音楽史上、不朽のものとなっている。曲は短い序奏の後2つのワルツの旋律があらわれ、華やかなコーダで結ばれるように書かれているが、ウィーンのワルツとはかなり性格の異なったもので、いかにも広々とした海を大きな船が勇壮に航海している、といった情景を想いおこさせるものである。

⑩ マスカーニ 歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より間奏曲  
P.マスカーニ(1863~1945)は、イタリアのオペラ作曲家。27才のときに作曲された「カヴァレリア・ルスティカーナ」は、短い一幕物のオペラだが、彼の出世作というだけでなく、どちらかというと下層階級の人々の日常を扱った現実主義オペラとして、当時の楽壇に大きな影響を与えた傑作といわれてい

る。この間奏曲は、曲中、もっとも美しい部分として、しばしば単独でも演奏されているが、美しい旋律に彩られた静かな部分に続き、ハーブの伴奏に導かれるように教会の賛美歌を想わせるオルガンが聞こえてきて、静かな抒情に加えて宗教的な雰囲気を感じ出している。

#### ⑪ エルガー 行進曲「威風堂々」第1番

エルガーがイギリス国民からもっとも敬愛されている作曲家であることは、「愛のあいさつ」のところで述べたが、この行進曲の中間部の旋律は、歌詞をつけて「戴冠式頌歌」として、第2の国歌のように愛唱されており、そのことから、エルガーの人気の高さが窺い知れようというものである。この曲は1901年に作曲されたもので、きわめて男性的で勇壮な主部と美しい旋律がゆったりと歌われる中間部からできている。

#### ⑫ ヘンデル ラルゴ〔オンブラ・マイ・フ〕

バッハと並ぶバロックの大作作曲家ヘンデル(1685~1759)は、とくにオペラとオラトリオの分野に多くの傑作を残しており、後半生をイギリスで過ごした作曲家として知られている。この曲はオペラ「クセルクセス」の第1幕で歌われるアリア「懐かしい木陰よ」を器楽用に編曲した作品で、原曲は、ベルシヤの王クセルクセスがプラタナスの木陰で休み、その緑の木陰の美しさを讃えて歌われるものだが、静かな抒情と気品に満ちた美しさに溢れており、聴く人の胸にしみじみとした印象を与える名作である。

# 美しいメロディを情緒豊かに聴かせてくれる指揮者、気品とエレガンスなアンサンブルで人気のイギリス最高のオーケストラ。

——安藤 博

## ●アンドルー・デイヴィス

イギリスの次代を担う中堅指揮者として期待されている指揮者アンドルー・デイヴィスは、1944年にハートフォードシャー州アシュリッジに生まれている。名門ケンブリッジ・キングス・カレッジを卒業後、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院で名教師フランコ・フェラーラに指揮法を学び、1970年頃から母国で演奏活動に入った。その後、ヨーロッパ各地の一流オーケストラに客演して徐々に実力を認められるようになり、1974年からは、小澤征爾が永らく音楽監督をつとめたことで知られる、カナダのトロント交響楽団の音楽監督となり、益々エネルギーを活躍を続けている。

デイヴィスの演奏は、若い人にはめずらしく、美しいメロディを情緒豊かにたっぷりと歌わせる点において、とくに優れており、しかも若々しい明快な表現力も併せもっているため、このようなアルバムには、正にうってつけの指揮者といってよいだろう。

## ●フィルハーモニア管弦楽団

フィルハーモニア管弦楽団は、EMIの名プロデューサー、ウォルター・レッグによって1945年に創設されたオーケストラで、現在では、ロンドン交響楽団とともに、イギリス最高のオーケストラといわれている。我が国では、50年代からカラヤン、そしてその後クレンペラーとの膨大な録音が紹介されることによって、きわめて親しみ深いオーケストラのひとつ

つとなっているが、とくにこのオーケストラの場合、機能的に優れた面だけでなく、そこはかとなく感じられる気品とエレガントなアンサンブルが、我が国の聴衆にも人気の高い理由のひとつとなっているのであろう。最近では、イタリア気鋭の指揮者ムーティ、シノーポリなどに率いられて、益々充実の度合いが高まっているようだ。



いとおしくらいに美しい、ひとつひとつの音楽にとりこまれた、  
ような素晴らしい演奏が続いた。

—— 田中成和

「オーイ、本番いくよ！」。

「!!!、ちょっと待って、あと5分」。

EMIアビー・ロード・スタジオNo.1の調整室は文字通り蜂の巣をつついたような大騒ぎ。1987年6月28日午後2時。時間ぴったり全員が顔をそろえたフィルハーモニア管弦楽団のメンバーと、指揮者のアンドルー・デイヴィス。音出しは1秒の無駄もない。これぞ英国流。

エルガーの《威風堂々》が、コンサート・ホールも顔負けの充分なキャパシティーをもつ第1スタジオいっぱいに響きわたる。

と同時に、エンジニアのマイケル・シーディがてきばきとバランスを整えてゆく、のだが、今回はちょっと違った。

ヴェテラン・エンジニアのシーディもまだ準備が整わない内から、スタジオの方からキューを出されてしまった!? 音出しを始めてから5分と経っていないのだから……。

確かにアンドルー・デイヴィスはすごくなった。録音セッションが始まるなり、日本からのスタッフは全員、感動に打たれていた。目前でこれから繰り広げられようとしていることへの「恐怖」に鳥肌が立った。

(「何で大袈裟な!」。話だけだったら、そう言うのは簡単。「当事者の勝手な思い入れサ。」)

でも、このCDをお聴きの貴兄(姉)、そうは一蹴

なさらないはず。

とにかく、《威風堂々》を開始したデイヴィスは、それこそ1小節おきにオーケストラに鞭を飛ばす。それも独裁的な命令調ではなく、ユーモアたっぷり、皮肉もたっぷりに。これに刻々と反応して音楽を完成させて行くオーケストラの力も感嘆モノ。無駄口たたく人はひとりもいない、いるとすれば調整室のディレクターくらいのもんだ!?

こんな調子で、前代未聞のセッションは始まった。短時間でこんな大編成録音のバランスを完璧と言えるまでに仕上げてしまったシーディのセンスと実力にも脱帽。

“LAND OF HOPE AND GLORY”(希望と栄光の国)という歌詞がついて、英国民には国歌以上に親しまれているのが《威風堂々》。偶然ながらもオープニングには最適だった。

だからと言って、録音セッションはホイホイと進んでおしまいになった、という事ではないし、トラブルが発生した、訳ではない。むしろ全ては順調に推移し、2日間/4セッションをフルに使いきった。

指揮者も、エンジニアも、オーケストラの楽員たちも、全員がものすごいノリを見せた。結果、単なる“take part”ではなくて、“contribute”になった。

例えば、休憩時間。オーケストラは、3時間のセッションの途中で一度30分、そして、セッションとセッションの間に1時間の休憩をとる。この間、フ

ルートは《時の踊り》のフレーズを、ハーブは《波瀾を越えて》のグリッサンドを、トランペットは《軽騎兵》のトロットのアンサンブルを、という風に真剣に、納得行くまでさらっている。

テクニカルには当然のように完璧な人たちが、マラーの交響曲に臨むのと同じ真剣さで、レハールの単純なフレーズを復習している。

彼らにとって演奏ミスなどなくて当然。いかにより良いものを生みだせたかが問題で、いい加減な指揮者や録音プロデューサー(?)はすぐに馬脚をあらわしてしまうことになる。「練習番号21から4小節のコールアングレのフレーズなんだけど…」。

プレイバックの後で、楽員からも良く声がかかる。だから、スコアの一言一音の全てに良く目(耳)を光らせていないと大変。

デイヴィスが「とても自然できれいに流れていたヨ」。

と答えると、ニコリとして目が輝く。彼らの方がずっと経験も知識も、そして能力も、豊富な音楽家たちなのに…。

優しさと謙虚さ。イギリスのオーケストラの美德だ。そして、フィルハーモニア管弦楽団の伝統。

1945年に、EMIの大プロデューサー、ウォルター・レグが創設したこのオーケストラは、当初から英国一のオーケストラとして、カラヤン、トスカニーニ、クレンペラーといった名指揮者たちと共にあった。

「世界で一番録音されたオーケストラ」と言われる程

の録音の多さゆえに、日本では今だにレコーディング・オーケストラと誤解している人もいるが、ムーティ、シノーボリらの薫陶を受けて、名門フィルハーモニアの伝統は脈々と受け継がれている。

トロントで12年に渡るオーケストラ・ビルディングの経験を経てヨーロッパに活動の本拠をもどそうとしている42歳の指揮者、アンドルー・デイヴィスがどこまでこのオーケストラの伝統を生かしてくれるかが、今回の録音の面白さでもあった。つまり、どこまでオーケストラをデイヴィスの音楽にひびきひびき込むか。

今度の選曲は彼らにとって、かなり奇異なものだったようだ。

まず、オーケストラのライブラリアンが苦勞した。スコアが見つからない。「ローザスとは何者?」、という具合。

資料が豊富なイギリスのこと、その辺のトラブルはすぐに解決した。

次は楽員達と指揮者。

「変わった曲目だねえ」「こんなのやったことないヨ」。

「大丈夫。昔とった杵柄<sup>きねがら</sup>」。と言ったのは、もとBBC コンサート・オーケストラで、ライト・クラシックばかり弾かされていた楽員。

もちろん初見譜の曲もあったがこれが面白い。

例えば《波瀾を越えて》がはじまった時。みんな

どんな曲かも見えていないから、おそろおそろの試し弾きは、だんだんずれていって、しまいにはバラバラになり、皆大笑いで、止まってしまった。

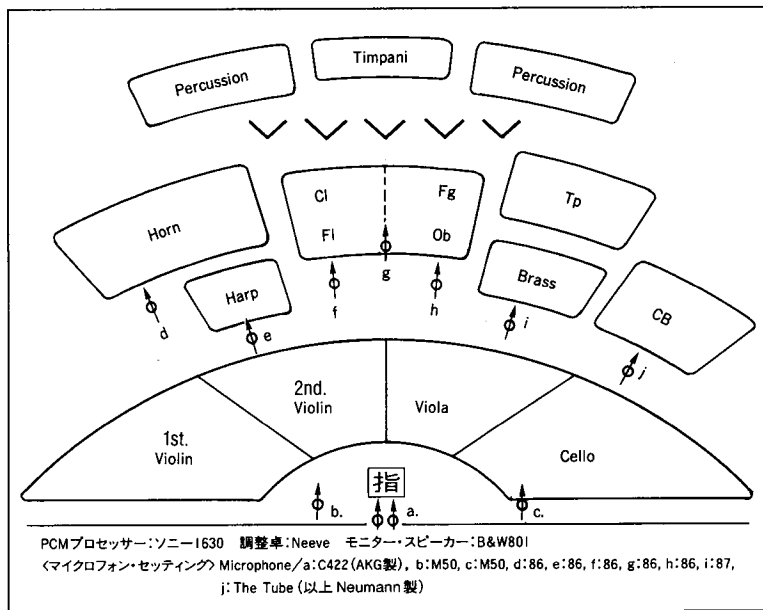
もちろん、2度目に弾きなおしたときは完璧。

こんな曲がとってしまう小品たちであっても、やはり立派なひとつの作品なのである。

演奏されてみると、ひとつひとつが、いとおしくうちに美しい。

このことは演奏している側にとっても同じだったようで、録音が進むにつれ、彼らの目つきが変わった。本気になった。音楽にとりこまれてしまったのだ。

作品の弱点を補いつつ、適切に音楽を誘導していたアンドルー・デイヴィスのバトンの力がここでクローズアップされねばならない。大作ではあらわれないデイヴィスの人間性が、ここでは十分に生かされて、全体を引き上げたと言える。



## DISC1,DISC2

総合プロデューサー：フリードリッヒ・ウェルツ  
(バイエルン放送協会)

小山 正 敏  
(東芝EMI)

プロデューサー：ウィルヘルム・マイスター  
(バイエルン放送協会)

里 見 清 司  
(東芝EMI)

バランス・エンジニア：ハンス・シュミット  
(バイエルン放送協会)

フォトグラファー：アンネ・キルヒバッハ  
小山 正 敏

録音年月日：1987年11月10,11,13,23,  
24,25日

録音場所：ヘラクレスザール、ミュンヘン

## DISC3

プロデューサー：中 田 基 彦

ディレクター：田 中 成 和

バランス・エンジニア：マイケル・シーディ

アシスタント・エンジニア：池 田 彰

録音年月日：1987年6月28,29日

録音場所：アビー・ロード・スタジオ  
ロンドン

ジャケット・デザイン：株式会社グラバー企画

制作協力：株式会社サンデュエット

企画・制作：第一家庭電器株式会社 **DAMP**

製造：東芝EMI株式会社



## 制作にあたって

日頃は、第一家庭電器をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。本年11月で当社は創立30周年を迎えさせていただきましたが、その記念としてこのCDを制作いたしました。

DAMオリジナルソフトを、制作開始してから15年目となりましたが、その間、誰にでも親しまれている、オーケストラの小品集をオリジナル録音したい、という希望を持ち続けていたところ、世界的な巨匠サヴァリッシュ氏の指揮と、ヨーロッパ最古の歴史を誇る名門バイエルン国立歌劇場管弦楽団という、最高の組み合わせで、DAM初の海外録音として実現のはこびとなりました。

サヴァリッシュ氏は、NHK交響楽団の名譽指揮者として、T.V等を通じて有名な方ですが、日頃のレパートリーは大作が多く、日本で本CDのような小品を指揮されることは殆んどありません。それをサヴァリッシュ氏が音楽総監督をされている、バイエルン国立歌劇場の来日公演（本年11月～12月）を記念して我々の希望による名曲集を快よくレコーディングしていただいたことは、世界の音楽界でも異例なことと思います。

その真摯で、品格の高い純音楽的な演奏は数あるオーケストラ名曲集の中でも、1・2位を争う名盤が完成したと自負している次第です。録音もミュンヘンのヘラクレスザールで、ドイツ人スタッフにより2チャンネル・デジタル録音されていますが、スケール感と奥行感のある豊かな音は、ヨーロッパ録音特有のものといえましょう。

ところでこの録音は、今春、全世界に先がけて、当社VIPメイト会員の方に、24金蒸着CDとして完全限定頒布されましたが、今回は、通常のアルミ蒸着CDです。そのかわり、名曲集をよりバラエティに富んだものにするため、アンドルー・デイヴィス指揮フィルハーモニア管弦楽団による12曲を加え、CD3枚組となっています。この録音も、東芝EMIの要望により、昨年6月、ビートルズで有名な、ロンドンのアビーロード・スタジオで収録されました。新進気鋭のデイヴィス氏の指揮のもとでフィルハーモニア管弦楽団が、流麗で親しみ易い演奏をしていて、特に、「マドンナの宝石」「輕騎兵」「中央アジアの高原にて」の3曲は、サヴァリッシュ氏指揮のものと、その演奏や録音等の違いを、お聴きいただくのも一興かと思えます。

なお、本CDの実現にあたり、サヴァリッシュ氏をはじめ、東芝EMI様、並びに関係各位に多大なご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

# Family Concert

## THE JEWELS OF THE MADONNA THE SKATERS WALTZ

### DISC 1

- ① グリク「歌劇「ルランとリョドミ」序曲」…… 5'19"
- ② ボロディン「中央アジアの高原にて」…… 7'21"
- ③ ムソルグスキー「交響詩「荒山の一夜」」…… 10'50"
- カバレフスキー：組曲「道化師」作品26
- ④ プロローグ…… 0'58"
- ⑤ ギャロップ…… 1'29"
- ⑥ 行進曲…… 1'08"
- ⑦ ワルツ…… 1'12"
- ⑧ バントマイム…… 1'14"
- ⑨ 間奏曲…… 0'50"
- ⑩ 叙情的なシーン…… 1'15"
- ⑪ ガヴォット…… 1'34"
- ⑫ スケルツォ…… 1'38"
- ⑬ エピローグ…… 1'56"
- プロコフィエフ「三つのオレンジへの恋」作品33より
- ⑭ 行進曲…… 1'34"
- ⑮ スケルツォ…… 2'24"
- リムスキー＝コルサコフ「スペイン奇想曲」作品34
- ⑯ アルボラダ…… 1'14"
- ⑰ 変奏曲…… 1'02"
- ⑱ アルカソーラ
- ⑲ シューベルト「アプシーの歌」…… 1'02"
- ⑳ アーサー・マッギン「ファンダンゴ」…… 1'02"
- 指揮：ヴォルフガング・サヴァリッシュ
- ライプツィヒ国立歌劇場管弦楽団
- w/ルイス＝ミナル(ヴァイオリン・ソロ) ⑬⑭⑮～⑳

### DISC 2

- ① スッペ：喜歌劇「軽騎兵」序曲…… 6'43"
- ② エーロール：歌劇「ザンパ」序曲…… 7'21"
- ③ スメタナ：歌劇「売られた花嫁」序曲…… 6'29"
- ④ スッペ：喜歌劇「詩人と農夫」序曲…… 9'21"
- ⑤ オッフェンバック「喜歌劇「天国と地獄」序曲」…… 9'24"
- ⑥ ヴォルフ＝フェラーリ：  
歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲…… 3'52"
- ⑦ ベルリオーズ「劇的物語「ファウストのこころ」より  
「ラッツィ行進曲」作品24…… 4'29"
- ⑧ シャブリエ：狂詩曲「スペイン」…… 6'27"
- 指揮：ヴォルフガング・サヴァリッシュ
- バイエルン国立歌劇場管弦楽団
- w/ペーター・ヴェブケ(チェロ・ソロ) ④
- w/ルイス＝ミナル(ヴァイオリン・ソロ) ⑤

### DISC 3

- ① エルガー：愛のあいさつ、作品12・3'35"
- ② スッペ：喜歌劇「軽騎兵」序曲…… 6'36"
- ③ レハール：ワルツ「金と銀」…… 8'18"
- ④ ボンキエリ：時の踊り  
～歌劇「ジョンダ」より…… 9'19"
- ⑤ ワルトフイル：スケルツォ・ワルツ…… 8'15"
- ⑥ ヴォルフ＝フェラーリ：  
歌劇「マドンナの宝石」より間奏曲…… 4'12"
- ⑦ イヴァノヴィッチ：  
ワルツ「ドナウ河のさざ波」…… 7'55"
- ⑧ ボロディン：中央アジアの高原にて…… 6'40"
- ⑨ ローザス：ワルツ「波濤を越えて」…… 5'34"
- ⑩ マスカニー：歌劇「カヴァレリア・  
ルスティカーナ」より間奏曲…… 3'11"
- ⑪ エルガー：行進曲「威風堂々」  
第1番 作品39の1…… 6'42"
- ⑫ ヘンデル：ラルゴ「オンブラ・マイ・フ」  
歌劇「クセルセス」より…… 3'14"
- 指揮：アンドルー・デイヴィス
- フィッハーモニア管弦楽団

Produced by DAIICHI KATEIDENKI CO., LTD.

Manufactured by TOSHI(BA-EMI) LTD.

Made in co-production with Bayerischer Rundfunk. Photo by Anna Kirchbach (DISC 1,2)

**DAMP**  
STEREO DCCD-0014-16